

小豆島八十八霊場歩き旅 2017



2017年6月

旅のチカラ研究所 植木圭二

序章 はじめに

■何故、小豆島お遍路

関東八十八カ所霊場を回った時に、ある寺の住職が熱く勧めてくれたのが小豆島八十八カ所霊場である。

小豆島は弘法大師つまり空海の出身の讃岐と京都との間に位置しているので、しばしば立ち寄り修業や祈念を行なったという島だ。従って空海が生きた1200年前からの歴史があり、空海とは関りが深い。それが関東八十八霊場とは大きく異なる。

そして小豆島の霊場は海岸近くの岩屋や山の上であって、瀬戸内海の眺望が抜群である。まさしく瀬戸内海を感じることができる。

それから小豆島は四国や関東に比べて小さいので巡礼コースは約140kmと一週間程度で歩ける。四国はその10倍くらいあるので、全て歩いた場合には50日以上かかる。サイズが手頃でよい。

そんな住職の話に心躍らせながらも、もう一つ私の背中を押したのは、私は島が好きだということだ。島はある意味外界と遮断されているので、何かのんびりしている。だから島中が大きな家族のような雰囲気がある。

食べものも旨い。海の幸はもちろんのこと、魚貝類だけでなく農産物も自給自足、地産地消なので新鮮で旨い。

お遍路は弘法大師と寄り添い旅をするので同行二人旅と呼ぶが、今回も妻と行く同行二人だ。そしてもちろんアル中（歩き中毒）を自認する私としては歩いて回る。

私は敬けんな真言宗宗徒でもないが、旅の心がそそる小豆島にもう行くしかない。あまり準備もしないまま船に飛び乗ってしまった。

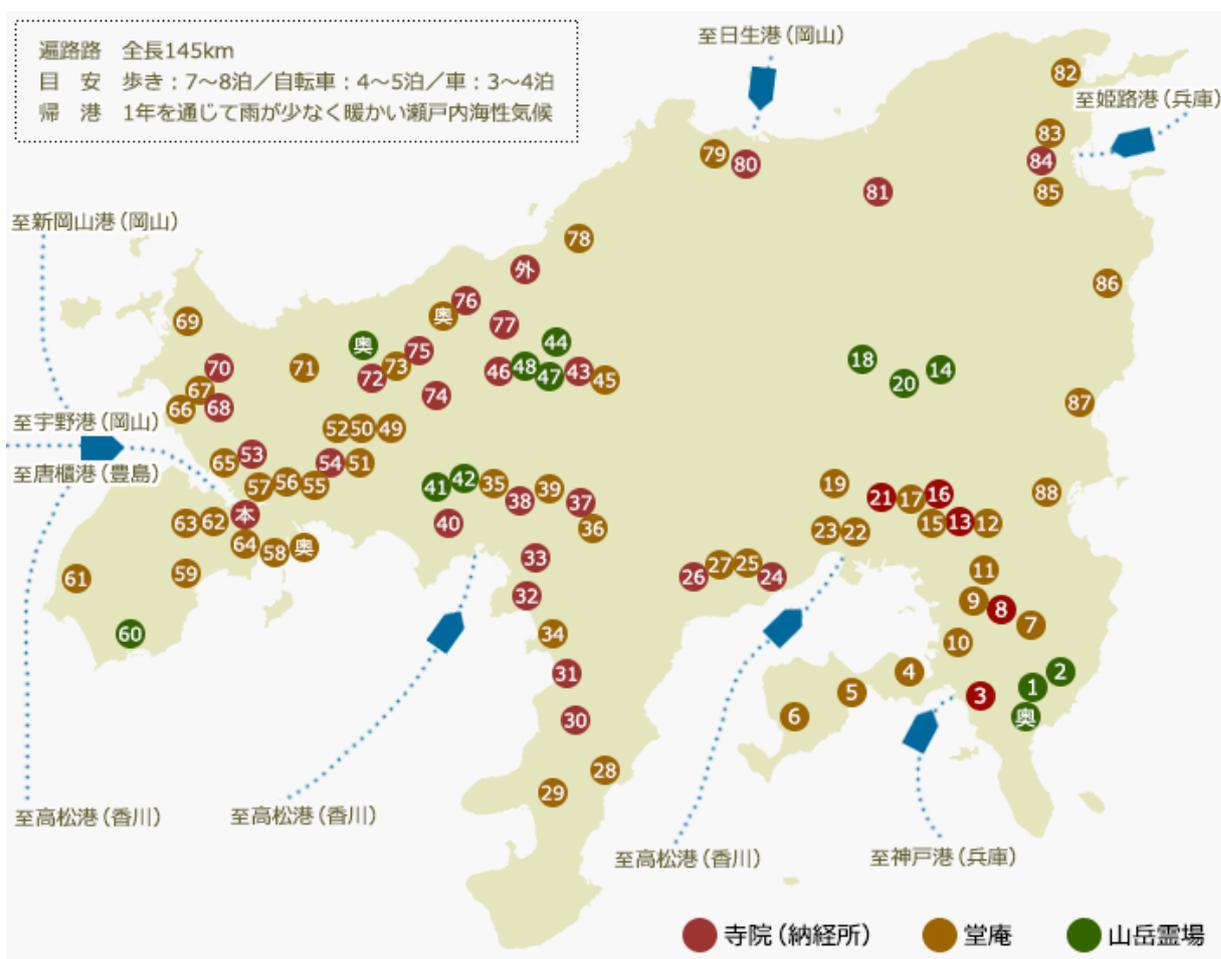
■行程

小豆島八十八カ所霊場巡りのオフィシャルサイトに載っている歩き遍路のモデルプランは6泊7日だが、一応予備日程を1日確保して最大8日間の予定で出発する。1日あたり約20kmを想定している。

霊場には1番から88番まで番号がついているが、この順番はあまり関係にないらしい。回り易く工夫してコースを選ぶのだが、時計回りで島を一周するのが一般的のようだ。

小豆島には飛行場がないので船で入るしかないが、港は島内全部で6カ所ある。どの港に入るかはどこから行くかで決まる。私たちは姫路から島に入ることを選んだ。

小豆島は地図で見ると牛の形に似ていると言われている。確かに西を向いて立っている牛だ。私たちは牛のしっぽの付け根部分にあたる北東部の福田港に入港する。そこから概ね時計回りに島を回ることにする。牛で言えば後足、腹、前足、頭、背中順番だ。



2017年5月24日水曜日、京都に住む娘の家を出て姫路に向かう。姫路からフェリーで約100分、季節は梅雨入り前の閑散期の平日なので、宿はフェリーの中から当日分だけの宿泊予約をした。そのあとの宿は予約していない。出たところ勝負だ。

■小豆島お遍路のしくみ

小豆島の八十八霊場は全てが寺ではなく、庵と呼ばれる小さな施設がある。庵とは国語辞書で

は「世捨て人や僧侶などの閑居する小さな草葺(くさぶ)きの家。大きな寺に付属している小さな僧房。」とある。まさしくそんな感じの施設であるが、ここ小豆島の庵は地域の人たちが管理している集会所的なものも多い。

寺はお坊さんやその家族など誰か居てくれるが、庵は無人のところほとんどだ。だから御朱印をもらうのは寺だけで、庵ではもらえない。そのために庵の御朱印もそこを管理している寺が代わりに押してくれる。

そして寺は 30 カ所しかない。残りは全て庵になる訳だが、実際には山岳霊場というのがある。山岳霊場とは山の上の岩壁などに造られた施設で、修行や祈願の場になる。施設の規模としては寺と言った方がいいが、人が住んでいるかという住んでいないので分類上では庵にしているようだ。

庵の存在が巡礼する側のお遍路にはメリットにもなる。一日に多くを参拝しようとする、寺の受付時間は公式には 7 時から 17 時なので、この時間内に寺には行かないといけない。ところが庵は無人なのでこの時間的制約がない。

そしてもう一つは寺の御朱印費用は 150 円なのに対して、庵は 50 円となっているので費用的にもメリットが多い。ちなみに四国や関東の八十八霊場巡りでは全て 300 円である。88 以上も行くのでこの差は大きい。

おっと、私が敬けんな信者でないことの証かもしれない。実にせこい。



第一章 雨の初日

■小豆島入り

姫路のフェリー乗り場は山陽電鉄の飾磨(しかま)駅から歩いて 30 分くらいのところにある。海に向かって歩いていたら、なかなか海の香りがしないのでおかしいと思ったら反対側の山方向、姫路城のある方向に歩いていることが判明する。

理由は駅を降りてまずは銀行を探したことにある。銀行は見つけたが、急いでいたこともあってそちら側が海方向と勘違いして歩き始めてしまった。なぜ銀行を探したかという、小豆島にはあまり多くの銀行が無いことが前日判明して、姫路で現金をおろしてから行こうとなった。当然クレジットカードも使えるところが少ないと判断してのことだ。

もう時間はない。駅まで歩いて戻り、そこから使いたくないがタクシーで港に向かう。何とか滑り込みセーフ。今回の旅は道に迷うことを示唆しているかのごとくである。

反省を込めてアドバイスをすると、離島や田舎に行く場合は郵便局（ゆうちょ銀行）のキャッシュカードを持っていくことがお勧めだ。学生時代に日本一周旅行をした時にもそうしていたことを思い出した。

フェリーの中はガラガラで、乗車率 1 割くらいしか乗っていない。

隣のテーブルに座ってきた関西弁のおばさん 3 人組が大声で話すので、うるさくて席を移動する。何故こんなにガラガラなのに私たちの席の隣に来るのが分からないが、久しぶりのうるさい関西弁は西国（さいごく）に来たのだと実感する。

福田港に着き、84 番雲海寺から私たちの小豆島お遍路が始まる。ここで御朱印帳と八十八霊場の地図を買う。この地図が結構アバウトなのでのちに苦勞することになる。

寺にある墓地は一区画が広く、関東の墓地とはだいぶ異なる。小豆島ではこのスタイルらしい。



■雨の中で道に迷う

1 時間も歩かないうちに、残念ながら小雨が降ってくる。初日から傘をさしてのお遍路とは悲しい。きれいに見えるはずの瀬戸内海の景色は残念ながら封印される。

国道 436 号を歩いていると 86 番当浜庵へという案内板があったのでわき道に入る。わき道は木々の中なので雨をしのげると思っていたことだ。

狭く急峻な山道を抜けて先ほどの国道にでた。だいぶ距離を稼いだ。結果的にはショートカットした訳だ。

これに味をしめて 12 番岡ノ坊への案内板があったので国道から外れて山道に入る。しかしこれが大きな間違いだった。ところどころにある案内板とスマホの Google マップを頼りに山道を歩くが、さまようこと 1 時間で結局ショートカットを諦めて近くを通る国道にでる。雨の中の山道は多少雨がしのげるが、足元も悪く決してお勧めできない。迷っているから心細くも感じる。

国道は長いトンネルになる。トンネルはまだ新しく、中には広い歩道もある。雨をしのげて快適に歩ける。近道と思って山道に入ったことを後悔する。そもそもトンネルとは、山の中腹をくり抜いたのだから最短ルートのはずだ。

何故かトンネルを抜けると雨が上がっている。ただ岡ノ坊は明日に回すことになる。

■ひろきや旅館

フェリーから予約した宿「ひろきや旅館」は遍路宿としてはみんなよく使うらしい。場所は牛でいうとイチモツのすぐ近くで、このあたりにはこの宿しかないからだろう。

私の靴はびっしょり濡れていて、靴の中まで水が入り悲惨なことになっている。どうやら靴底に穴が開いているようだ。そして右足の靴底に違和感がある。下敷きがめくれあがっていることが原因だ。応急処置をしてから、新聞紙をもらい、靴の中に入れて水分を取る。

妻も足の指が靴にあたって具合が良くないという。二人とも初日から靴のトラブルだ。

食事の時に宿の女将と話す。女将は実に気さくな人で、私と同じく位の年齢ながら「兄さん」と呼んでくる。最初は誰の事か分からなかったくらいだ。どこから来たかとか、歩き遍路なのかなどと会話をしていると、2つ気になることを聞いてきた。

明日荷物は何処へ持っていこうか。と聞いてくる。何を言っているのか分からないので聞き返すと、どうやら歩き遍路は大変だから明日泊まる宿に運んであげるということだ。

なんてすごいサービスをしているのか。荷物は自分で背負って歩くものだと考えていたので、予期せぬ一言に感激してしまう。ただコースを考えると連泊するのもありかということで、その際はお願いするかもしれないとだけ答えておいた。

そして今度の土曜日の宿は大丈夫かと聞かれる。日曜日に小豆島オーリーブマラソンという大きな大会があり、5000人からのエントリーがあるので前日はどの宿もいっぱいだという。

すぐに予約してみますとだけ答えておいたが、部屋に戻っているいろいろ調べるがやはりどこも空いていない。今日はまだ水曜日で土曜日まではまだ少し時間がある。

コースを検討した結果、裏技を発見する。土曜日の夜だけ一番近い高松まで船で行って高松のビジネスホテルに泊まり翌朝にまた戻ってくるというウルトラCだ。船で片道1時間、費用も往復1320円ということで十分に往復できる。この作戦で乗り切ることにする。

結局この宿には土曜日朝まで3連泊することになる。客室は全部で20室くらいあるが、現在のお客は私たち以外にもう一人だけという状態だ。それが土曜日には満室になるというから、いかにマラソン大会が地元に与える経済効果が大きいことが分かる。

マラソン大会のゲストは増田明美というから、これもまた驚いてしまう。

この宿はトイレと風呂は共同で、部屋や景色も良くはない。けれどもあたたかい気配りと値段が魅力だ。宿泊費は2食付きで税込み6700円、フロントには酒やつまみも売っていて発泡酒は160円と安い。

斜めドラムの洗濯乾燥機も無料で使わせてくれる。洗剤も大きな箱のものを勝手に使ってくださいという。濡れた服や靴下がその日のうちに洗濯乾燥まで終わってくれる。

第二章 雨上がりの二日目

■醤油の街

女将の話では、小豆島では2日間雨が続くことはまずないという。したがって雨は朝のうちにあがるという。その話を信じて、朝の出発を少し遅らせて10時近くに宿を出る。見事に雨はあがっている。さすが小豆島、雨の少ない瀬戸内気候だ。

昨日行けなかった岡ノ坊は宿のすぐ近く、それをやっつけて？街中に入っていく。

9番庚申堂を探していると昔ながらの醤油工場と民家の街並みの中にいる。島内の位置としては牛のイチモツのあたりになる。

民家の表札は醤油の樽をモチーフしたものに統一されていて、醤油のにおいも漂い独特の風情を感じる。醤油工場では社員が働いているが、どこことなくのんびりしているように感じる。少なくともアクセクはしていない。これも島の雰囲気だろう。そして醤油工場の間を抜けて庚申堂にたどり着く。

ここは街の中の典型的な庵で、街のちょっと小高いところに建っている小さな建物だ。そこはある意味地元の人たちの集会所みたいな役割もあるようで、宗教とコミュニケーションの場になっている。ほとんどの庵は地元の人々の生活と一体化している。

小高い場所なので街並みの向こうに海も見える。



■いよいよ山岳霊場へ

小豆島は決して平坦ではなく、瀬戸内海に浮かぶ山と言った方がいい。最高標高は816mなので関東平野にポツンとある筑波山と同じくらいだ。

山は仏教の修行の場であり、小豆島が筑波山と大きく違うのは岩山が多い。だから洞窟を掘って瞑想の場にする。

そんな海と洞窟の場所は空海の名前の由来にもなっている。

空海の俗名は佐伯 眞魚（さえきの まお）、774年生まれ。835年没なので61才まで生きた。ちょうど今の私の年齢と同じで何やら感慨深い。

その眞魚が室戸岬の御厨人窟（みくろど）という洞窟で修行をしている時に見えたものはただただ空と海だけであった。この経験から空海と名のるようになったという。

だからここ小豆島の山岳霊場もまさしく修行には適した場所なのだろう。

ちなみに弘法大師という名は約 100 年後に後醍醐天皇からの諡（おくりな）である。

小豆島の 88 霊場のうち山岳霊場は 14 カ所ほどある。それらには人が住んでいないので区分としては庵になる。

今日これから行く山岳霊場は 2 番碁石山、1 番洞雲山、3 番奥の院の隼山だ。山岳霊場といっても比較的近くまで車で行ける道がある。従って山登りとはいえ、車が走る道を歩くことが多い。ただ車はほとんど走っていない。もちろん車だけでなく人もいない。その道を私たち夫婦だけでひたすらに歩く。雨上がりの天気で山はまだ霧に包まれている。その霧の中を歩くと、山の木々と霧、ちょうどマイナスイオンのトンネルのようだ。

マイナスイオンのトンネルを満喫していると大きな弘法大師の像がある碁石山にたどり着く。10m くらいはあろう大師像は瀬戸内海を見て悠然と立っている。よくこんな山の上にこのような大きな像を作ったものだと感心してしまう。



そこから 10 分くらい細い山道を歩くと 1 番洞雲山に出る。100m はあろうかとい石の岩壁に観音堂を掘っている。ここからの眺望も素晴らしい。

霊場の番号にあまり意味はないと書いたが、さすがに 1 番をもらっているだけあってここから 88 の霊場はここから始まるという感じがする。洞窟の天井は高く、奥行きもありヒンヤリとしていて瞑想するにはもってこいの場所だ。



この洞窟を掘るという作業だけでも重機のない昔のことならば相当に年月がかかったと想像できる。それは一人の一生だけでは足らずに何世代にも受け継がれたのかもしれない。

夏至観音という説明看板が立っている。夏至の時期の午後 3 時に岩壁に太陽光が当たり、光の観音様が出現するという。この時間が 3~5 分間くらいで、ちょうど般若心経ゆつくりとなえる時間だという。この時の太陽の位置はインドのガンジス河の河口、カルカッタの真上に位置すると書いてある。偶然かと思うがこのように書かれていると神秘性というか有難みを強く感じるから不思議だ。夏至観音、一度見てみたい。



さらに岸壁の下の山道を 30 分くらい歩くと 3 番奥の院の隼山に着く。洞雲山から車で直接入るのは無理で、車の場合は大回りをしないとイケない。それも狭い道なので軽自動車が重宝される。ここ小豆島に来てから軽自動車の割合が非常に高いのはこんな理由もあるのだろう。

尚、3 番霊場としては観音寺という寺が別があり、その観音寺の奥の院ということで隼山がある。そのような奥の院というのが他にもあり結果 88 カ所よりも多くの霊場を巡ることになる。

奥の院という名前のおり山の中、岸壁にお堂はひっそりと建っている。結構広い境内であるが、誰もいない。通いで下からお坊さんがやって来ているようだが、今日は不在ということをお先ほど行った寺で聞いてきた。寺同士のコミュニケーションもなかなかのものになっている。島全体が家族のようだという感覚かもしれない。

■美井戸神社

観音寺近くに美井戸神社というものがある。うん、何だ、この神社。全くもって変な神社で、8m ほどある黒い宇宙人のような像がご神体らしい。案内板によると、この像は **Anger from the bottom** という名前が付いている。訳すと「地底からの怒り」になるか。実はあのビートたけしとヤノベケンジ（日本人、現代美術家）の作だと書かれている。だから美井戸（ビート）神社というのか。

像はその二人の共同制作で瀬戸内海国際芸術祭 2013 に出展されたものを、翌年に地元有志でこの地に美井戸神社を造り祀ったという。

この場所がかつて古井戸があったところで、この神社は水の恵みを祈願するという。



瀬戸内海の隣の豊島や直島は芸術の島で有名になっているが、ここ小豆島も負けじといろいろやってくれる。

■島は新鮮な魚料理

3 番観音寺を終え、地元の人に食事処を聞くと坂手港にある「大阪屋」という食堂を教えてもらう。いかにも港にある地元の人が集まりそうな食堂だ。

私は「ひしお丼」、妻は小豆島産のハモを使った「ハモの卵とじ丼」を食べる。「ひしお」は漢字で書くと「醬」で、醤油工場の多い地元という意味だろう。ひしお丼とは地魚の海鮮丼のことで、それを地元の醤油で食べるという意図らしい。

やはり新鮮な地元の魚は旨い。



■岬の分教場

6 番田ノ浦庵を出てすぐのところ岬の分教場がある。壺井栄の小説「二十四の瞳」の舞台になったと言われる建物だ。如何にもそれらしい木造平屋建ての建物と校庭がある。



小説では瀬戸内海べりの一寒村としか表現していなく地名は一切でてこないが、作者の故郷が小豆島なので映画やテレビ化では全て舞台を小豆島とした。

ひょっとして先を制して別の島が「二十四の瞳」の舞台だと名乗りを上げていたら、小豆島とは結びつかなかったかもしれない。

早く言ったもの勝ちかも知れない。そういえば「木枯し紋次郎」という小説、テレビ番組があったが、これも上州新田郡（こおり）としか書かれていないが、群馬県藪塚本町（現、太田市）が名乗りを上げて認識されるようになった。

二十四の瞳の内容は、女性教師と小学校に入学した12人の生徒のふれあいを軸に、日本が第二次世界大戦を突き進んだ歴史のうねりに、否応なく飲み込まれていく女性教師と生徒たちの苦難や悲劇を通し、戦争の悲壮さを描いた作品である。

小説は戦後 7 年後に発表、映画化はその 2 年後というので、高度成長期の前にこれらが小豆島をいっきに全国的に有名にした感がある。

約 1km 先には二十四の瞳をメインにした映画のテーマパークも出来ている。残念ながら往復 2km は徒歩では見に行く根性が出なかった。

■島の人は親切

山の分教場から宿に戻る途中、県道を夫婦二人で歩いていると軽自動車が止まって、運転していたおばさんが乗せていきますよと声をかけてくれる。ヒッチハイクならぬ逆ヒッチハイクとでも呼ぶのだろうか。私にとっては知らない人から乗せてくれるという声をかけられるのは生まれて初めての経験になる。

歩き遍路ですからと言って丁寧に断ったが、しばらく歩いてから後悔し始める。それは宿まで 2 時間近く歩くことになるので体力的なこともある。足を痛めている妻は少し不満な顔をしている。

しかし私が後悔したのは、せっかくの厚意や地元の人との交流を無にしたことが残念でたまらないのだ。歩き旅に固執して厚意や交流を無にしたら意味がない。私たちは小豆島に徒歩レースに来たのではないことに気が付く。

なんてもったいないことをしたのだろう。後悔先に立たず。

10 番西照庵まで何とかたどり着く、もう 6 時だ。宿に電話したらすぐに車で迎えに来ると言う、ありがたい。厚意は無駄にしない。

宿に帰った時には発泡酒が 2 本テーブルに置いてある。連泊のサービスというからこれもまたありがたい。

第三章 最高峰をのぞむ三日目

■いよいよ本格的な山岳霊場

小豆島の最高峰は星ヶ城山 (816m) で、この山の付近に寒霞溪という溪谷がある。日本三大溪谷の一つという景勝地で瀬戸内海国立公園になっている。眺望が良いということは修行や信仰の場にもなっており、山岳霊場もいくつかある。そしてこの山岳地帯はいつものように小豆島を牛に見立てるとちょうどヒレの部分にあたる。

それにしても日本人は三大〇〇と言うのが好きらしい。

残念ながら今回は寒霞溪まで行く余裕がないので断念するが、中腹の標高 500m 弱のところには 14 番清滝山がある。

旅館のある街中から歩いて登る。最初は車も通る比較的平坦な道だが、そのうちに 4 輪駆動車

なら何とか登れるような山道になる。木漏れ日が差し込み、ウグイスのさえずりが盛大に迎えてくれる。実に気持ち良い。何しろ人が誰もいない。けれど仏に守られているような気持で危険は感じない、安心感がある。

最後は4輪駆動車でも到底いけない登山道と急な階段になって、都合2時間くらいで清滝山に到着する。

さすがに景色が抜群に良い。昨日上った山、突き出た半島、小豆島町の街並み、そして瀬戸内海がきれいに見え、四国の姿もぼんやり見える。あまりに景色がよいので修行になるのだろうか心配になる。いやこの景色が人間の煩惱などを無くして悟るのに良いのかもしれない。そんな気持ちにしてくれる。

この寺には面白い金剛触菩薩という寝姿の菩薩の像があり、説明文によると触るとご利益があると書かれている。寝釈迦は見たことがあるが菩薩で寝ているのは初めてだ。釈迦が寝ているのは余命いくばくかで体力がないので寝ながら説教をしたのだが、菩薩は悟る前の修行中の身だ。見れば釈迦の寝姿とは違って、立像をそのまま仰向けにした感がある。



20番仏ヶ滝、そして18番石門洞に行く。

仏ヶ滝には通いで管理するおばさんがきていたので少し話をする。毎日12時半には観光バスが来るので対応するために来ているようだ。

石門洞も無人の寺であるが、冷たい麦茶が置いてある。ご自由に飲んでくださいと書かれている。お坊さんあるいは地元の人が通いで来ているのかも知れない。歩いて喉が渴いていて、ありがたくいただく。



■また地元の人親切

山岳霊場から降りてきて19番木下庵を探している時に、地元の人らしいウォーキングのおばさ

んが前から来たので聞いてみる。何しろ地図がアバウトで、この辺りは道が新しいので案内板もない。スマホの Google マップで探してもいいのだが、聞いてしまうのが手っ取り早い。

おばさんは、分かりづらいから一緒に行きますよと。30分くらいの時間ではあるが目的地まで同行してくれた。

感動したのは、次の〇〇寺にはこういう経路で行った方がいいですよと言われて分かれたのだが、30分くらいしてから追いかけてきて、その〇〇寺は 88 霊場に入っていないと近所のおじさんに言われたので伝えに来てくれた。

地図を持って回っているのだからこちらでも分かるのだが、本当に親切なおばさんだ。このおばさんだけではなく、島の人は歩き遍路には特に優しくしてくれるような気もする。

■他流試合

既に 2 時半を過ぎている。山岳霊場巡りは食事処がないので今日は昼食抜きを覚悟したが、16 番極楽寺の近くにお好み焼き屋「大ちゃん」を見つけて入る。

私は大阪に住んでいたので大阪風お好み焼きを自分で作る。自称お好み焼き師を名乗るが他流試合するつもりで入る。この店のお好み焼きは山芋を入れていない生地だがそれなりにふっくらと仕上がっている。大阪風とはやや異なる味で、大阪風から広島風への中間的な感じで大阪に近いこの島の特徴を出している。

メニューで面白いのは「うどんモダン」と言うのがある。モダン焼きは焼きそばの麺をお好み焼きの上に乗せて焼くのだが、これをうどん麺にしている。さすがうどん県だ。

いい勉強になり、他流試合もまた楽しい。

■寺はどこも立派

小豆島の寺はどこもみな立派、たずまいに落ち着きと尊厳がある。手がかかっていてお金もかかっているということが分かる。おそらく檀家がしっかりと寺を支えているに違いない。つまりここに住む人々がとても信心深いということだろう。にわかお遍路の私たちとは気持ちや、人生における仏教への位置づけが全く違うのだろう。どの寺に行ってもそんな気持ちになる。

16 番霊場の極楽寺はまるで城のようだ。畑の真ん中を真っ直ぐな道が 100m くらい延びていて、そのアプローチの道を歩いて行くと四角い大きな濠のような池がある。石の橋が架かっていて、それを渡って階段を上がると門があつて境内に入る。境内は城壁のような壁に囲われていてその壁から池の間に石垣があるので、この感じが城に似ている。

この極楽寺は、牛でいうと下腹くらいの位置にある。



■ひろきや旅館 3 連泊

今日は 28 番阿弥陀寺でおしまいにして、また甘えて宿に電話すると迎えに来てくれる。

昨日は連泊サービスで発泡酒が 2 本。さらに 3 連泊目には缶酎ハイ 2 本が加わった。

値段からして食事は正直言ってあまり期待はしていなかったが、品数充分で地元の刺身などが 3 日間とも違うメニューで出てきた。3 泊目の夕食は寿司、ソーメン、蒲鉾のグラタンとヒラメの差し身というから、予想をはるかに超えた。

第四章 牛の前足を歩く四日目

■ひろきや旅館に感謝

3 連泊してチェックアウト時にはお土産をくれるから漬け物を 6 袋選ぶように言われる。どうせもらうなら、あまりかさばらないほぼ同額になるオリーブオイルにしてもらった。どうやら一人一泊で漬物一つ相当らしい。

最後に宿の車で 28 番薬師堂までおくってもらう。本当に感謝である。

今日は三都半島を歩く、牛の前足部分だ。

■誰もいない

薬師堂から次の 29 番風穴庵へはへんろ道と呼ばれる山道を歩く。半島越えの道になる。

誰にも会わない。猪にはよく遭遇すると聞いたが、いまだに猪や猿にも会わない。黙々と歩くと、だんだん夫婦の会話も無くなっていく。



29 番風穴庵は山岳霊場ではないが、三都半島の先端近くの集落の高台にあるので眺望バツグンだ。海沿いの集落と岬、そしてエメラルドグリーンの海の向こうに四国まで見える。そしてそんな田舎の高台の庵には私たち二人だけしかいない。

そして私は昨夜の飲みすぎで腹の具合がおかしく、早急な処置が必要だったので急いでトイレに駆け込む。寺だけでなく全ての庵にも全てトイレが付いている。ありがたい。

やはり昨夜の 3 連泊のサービスの発泡酒や缶酎ハイがきいたらしい。



■牛の前足を付け根まで歩く

31 番誓願寺は大蘇鉄が境内の真ん中にある。国指定の天然記念物で日本一と看板に書いてある。大正 13 年に指定されたというので既に 100 年近い。蘇鉄の周りは 30m くらいある大蘇鉄だ。確かにこんな大きいのは初めて見る。

そしてその前にあるのが本堂かと思ったが本堂は裏山の上にあるという。階段を 100 段くらい登って本堂にたどり着く。本堂からは街並みや海が見える。

この誓願寺は牛でいうと、前足の膝あたりだ。



32 番愛染寺のすぐ近くの道の駅、小豆島ふるさと村にて昼食をとる。小豆島と言えばそうめんが有名であるが、私は「オリーブラーメン」、妻は「こびきうどん」を注文する。夫婦で別々に頼んで少しずつ交換して食べるので同時に 2 つの味が分かる。

オリーブラーメンは小豆島の手延べ麺にオリーブオイルを練り込んだラーメンで塩味のスープが良い出汁が出ていて旨い。タレントのマツコデラックスがテレビで紹介してから売れているという。

こびきうどんとは、そうめんの製造工程で「小引き」という作業があってその工程で出来るうどんと同じくらいの太さの麺をこびきうどんという。その意味ではそうめんの元になる。

帰宅してから得た情報では「オリーブそうめん」が旨いらしい。オリーブの実を麺に練り込み、表面にはオリーブ油を使用した麺で、黄緑色をしている。これにオリーブオイルをかけて小豆島の塩をふって食べると旨いという。

33 番長勝寺もとても大きな寺だ。牛でいうと前足のスネ肉あたりにある。お茶を一杯ご馳走になると、そこで若いお坊さんと話をする機会を得た。

長崎出身の彼は高野山で修行をして、ここ小豆島に赴任したという。小豆島を気に入っている

ようで、山の上の方を指さして長勝寺の管理する山岳霊場があそこの岩壁のところにあるという。そこから見る景色、それは瀬戸内海の島々と海との調和、そして夕陽がとてもきれいで感動的という。

名刺交換をするが、大変面白い名刺をもらう。横書きの名刺に住所などは名刺の下のほうに横書きで書かれているが名前だけが縦書き真ん中に位置している。まるで名前が石塔のように立っている。

■高松は国際都市

宿は港近くのパールホテルというビジネスホテルで和室が二人で 7000 円。予約サイトのポイントがたまっていたので 5800 円で泊まる。フロントのおじさんが愛想よく対応してくれる。

高松と言えば讃岐うどん、早速うどん店に入る。店には外国人も来ており店員が片言英語ながらスピーディな対応をしているのに驚く。外国人の接客に慣れている。そういえば港や駅でも多くの外国人を見かける。なぜ外国人が多いのか。ここは四国の高松なのに。

どうやらアートの島である豊島や直島に行くのが、ここ高松が玄関口になっているかららしい。そして高松空港はソウル、上海、台湾、香港からの国際便が就航している国際空港になっているのでアジアからの旅行者が多く入って来るといふ。

関東にいるとそんな事情は伝わってこない。やはり現地に行って肌で感じるのが重要だ。

第五章 タフな五日目

■タフな一日

高松と小豆島を結ぶフェリーの中では温かいうどんが食べられるようになっていて、乗客皆がうどんを食べている姿が印象的だ。私たちが朝からうどんを食べる。

41 番仏谷山へは 40 番保安寺の裏からへんろ道を歩いて登る。へんろ道といってもほとんど山登りで、30 分程で前が開けて車の通る道に出る。その道をさらに 30 分程上ると仏谷山に着く。

苦勞して登った甲斐もあって瀬戸内海を見る景色が素晴らしい。特に石灯籠越しに望む瀬戸内海と島々のショットは最高である。



さらに 30 分程上り坂を歩くと 42 番西ノ瀧にたどり着く。長い階段のアプローチが続き、階段の両側に延々と灯籠が立ち並ぶ。灯籠の本数はゆうに 100 本は超える。何十段もの階段の下に瀬戸内海がひろがる光景もまた素晴らしい。



■ 2 回連続の逆ヒッチハイク

山から下りて、43 番浄土寺を目指すために県道を 30 分くらい歩いていると、乗せて行ってくれるという親切な人に声を掛けられる。この先歩くと 1 時間ほどかかるが、本日の行程はタイトなのと、ご厚意は受けると決めていたので二つ返事でお世話になる。

小豆島に里帰り中のおばさんで、旦那さんは〇〇製菓の会長だったという。会社を辞めて昨年から夫婦で旅行しようとしたら旦那さんが体調を崩して行けなくなったという。そんな身の上話をたくさんしてくれる。見ず知らずの旅の者には話易いものだ。

次の 44 番湯船山に行く途中で軽ワゴンのおじさんがまた声を掛けてくれた。このおじさんは消防団の服を着ている。本日午前中にあったマラソン大会の警備に駆り出された帰りという。そういえば今日は日曜日で、5000 人のオーリーブマラソンがあったことを今思い出す。

湯船山までの地元の人しか分からないような道を乗せてもらう。それなりの坂道なので随分ラッキーだ。

その湯船山から 47 番梅尾山に行く途中には見事な棚田が広がる。また湯船山は湧き水が有名で、ここは蛍の観賞ができるという。夜になると街のホテルが蛍ツアーと称してバスでお客を連れてくるという。

その先に 48 番毘沙門堂があるが、ここは岩壁をくり抜いて造った霊場だ。中はヒンヤリとしていて気持ち良い。いかにも祈りや瞑想の場だ。



■島の暮らしを聞く

54 番宝生院にある真柏（シンパク）は国指定天然記念物で、根元の周囲は 16m で高さは 20m 日本最大という。応神天皇が植えたという言い伝えで樹齢は 1500 年以上と推定される。この真柏を見るための訪問客も多いという。

御朱印をもらうときにこの寺の若い女性と話をする。彼女はこの住職の娘のようで、高校まで小豆島に住み、大学は島外に出てまた戻ってきたという。若いながら、いや若いからかもしれないが、島の生活や未来についていろいろ話始める。

この島に移住したいという人がいるが、車の免許がないという。どこに住んだらよいかアドバイスをお願いされたが、困ってしまったという。車がないとやはり生活が大変だ。

医療面でいうと、総合病院はあるが手術はできないという。常駐の麻酔医がいないので手術が予定されている場合は麻酔医に島外から来てもらうが、急に手術が必要な場合は島内ではできない。手術ができないというのは設備の面ではよく聞く話だが、麻酔医が原因というのはあまりにもったいない。

最近セブンイレブンが 4 店舗開店したという。ようやくできたということだが、これは画期的なことだ。コンビニエンスストアはトラックでの物資の供給が生命線なので離島においては大手チェーンの店は見かけない。ここはフェリーボートの便数、時間、運賃で折り合いが付いたらしい。

コンビニも出来て都会化されてきてはいるが、基本的には過疎で人口が減っている。いろいろ語ってくれた彼女は家を継ぐのだろうか。そんなことを考えながら寺をあとした。

■誤算だった鹿

56 番行者堂からその日の宿の旭屋旅館に向かう途中、もう夕方になっている。民家の裏でガサガサ動く音がする。見ると鹿が網にかかっている、もがいている。罨ではなくて民家の裏の路地に境界を示すような網が張ってあって、鹿の角がこの網に絡んで外れないでいる。

ここは山ではなくてもう人里で、こんなところにも鹿がおりてくるのかと驚いてしまう。鹿を助けるべきか、あるいはその家の人に教えるべきか少し考えたが、どうしたらよいか分からずに結局何もしないでその場を離れた。

あの鹿はどうなったのだろうか。うまく逃げられたのか、それともあの家の人に鹿鍋にでもされているのだろうか。

鹿と人間の生活圏が本当に近いということを実感する。



■旭屋旅館

今日泊まる旭屋旅館に予約をとる時にひろきや旅館の紹介と言うと、宿の人は何か安心したような受け答えになる。そして宿泊費を聞くと、ひろきや旅館と同じで良いという。インターネットで調べるとどう見てもこちらの旭屋旅館の方が高いはずだが、なんとありがたいことだろう。

コミュニケーションとでもいうのか、ここでも島独特の家族的なつながりや暖かみを感じる。

宿は高松や岡山の玄関口の土庄港に近い便利なところにある。土淵海峡に面していて部屋からはその海峡も対岸も見える。何しろ狭い海峡だ。



宿の設備や部屋は綺麗で心地よい。風呂もタイル張りのきれいな風呂でオリーブのエキスを入れているというのでいい香りがする。ちょっとした温泉気分になる。

妻が女湯で一緒になった人と話をしたら、この宿はとても評判が良いという。

食事は地元の食材を使った料理だが、山岳霊場を巡っていたので昼食を食べる場所も時間も無くなり結局昼食を抜いたので、空腹からお櫃にあったご飯を全部食べた。

部屋に戻ってゆっくりしているとドアをノックする音が聞こえたので開けてみると、食事の世話をしてくれた仲居さんが立っている。

彼女は、お櫃のご飯が空っぽになっていたので食事が足らなかったのではないかと。良かったらおにぎりでも握りましょうかという申し出をしている。

私は今まで旅行で 1000 泊くらいしており、当然多くは宿に泊まり食事をするが、こんな風に気を使ってくれたのは初めてである。歩き遍路をしているからお腹がすくという気遣いだろうが、本当にありがたい。全く予想を超えた気遣いには感激する。これが本当の「お・も・て・な・し」だと思う。

第六章 六日目は牛の頭を歩く

■路線バスを使う

宿は小豆島一番の都会の土庄（とのしょう）にある。土庄は牛でいうと首の部分で、今日はこの周辺を回ることにする。

まず路線バスで 70 番長勝寺まで行って、歩いて土庄まで戻ってくることにする。

バスに乗ると、私たち夫婦二人だけの貸切り状態なので恐縮してしまう。これは決して今日だけではないだろう。多分運行のほとんどは乗客なしで走っているのだろう。過疎地における公共交通機関は難しい問題だ。

それにしても運転手はどんな気持ちで運転しているのだろうか。

バス路線を乗り継ぐとほぼ島を一周できる。ちなみに東西を結ぶ国道、つまり牛の首の部分から腹を通して尻尾の付け根までバスで1時間ほどだ。本数は少ないが、渋滞がないので時間通りの運航で利用価値は高い。

便利な1日券や2日券、高松琴平電鉄のIruCa（イルカカード）という割引になるICカードもある。残念ながらSUICAやPASMOは使えない。

ずっと歩き旅をしていると、たまにはこういったバスや自転車に乗るのも気分転換や時間の節約には良い。何も全て歩かなくてはいけない訳ではなく、小豆島という場所を如何に感じるかということとはとても大切なことだと思う。

■お遍路はウォークラリーやオリエンテーリング

土庄に戻り、小豆島八十八霊場巡り総本院のすぐ近くに64番松風庵があると聞いていたので、総本院に行く前に松風庵に寄って行こうとしたが見つからないまま総本院まで来てしまった。戻って探すが見つからず、また総本院に向かっても再々度見つからない。結局は総本院で詳しく場所を聞いてようやく見つけることができた。

松風庵が見つけれなかった理由は神社の陰にあって見落としていたことであるが、この旅に出てから迷うことが多い。特に庵が見つからない。

何故、迷うのか。

当然のように昔は自動車などなかったので、お遍路は全て歩いて巡っていた。ところが近年は道が整備されて車でかなりのところまで行けるようになる。昔の道がへんろ道として現在も部分的に残っている。へんろ道は車が通れる道もあれば、ハイキングコースや山登りルート、人間ひとりが歩ける幅の街中の路地のようなところもある。

国道や県道含めて車が通れる道だけ使うと遠回りになるケースが一般的で、へんろ道を使うとショートカットになることが多い。その代わり急な坂道だったり、階段だったりする。

このへんろ道を使った方が良い場合と、使わない方が良い場合とがあるので少し悩まされる。

へんろ道には案内板があったり、なかったりで苦勞する。へんろ道は地図に載っていないことがある。現在も生活に使っている道路は地図に載っているが、山の中の獣道のようなものは当然載っていない。

そしてもう一つが目的の庵が地図で見つからない。今回最初に買った地図のような観光用のイラストマップではアバウトな位置しか分からない。時にはGoogleマップに載っていない庵もある。GPSで自分の位置を確認しながら歩くにしても目的の庵の位置が分からないのでは探せない。小さな庵ほど苦勞する。

しかしながら、そんな苦勞をしながら巡るというのもウォークラリーやオリエンテーリングのようでかえって面白い。人間とは不思議なもので四苦八苦していくうちに段々と次の庵はどう攻略しようかなど楽しんでいる自分に気が付く。

そんな苦勞を含めお遍路の修行なのだろう。

■見どころいっぱい

小豆島はお遍路だけではなく、いろいろ楽しめる。瀬戸内海で2番目に大きい島で、景勝地も多い。

58番西光寺の近くに小豆島国際ホテルがあり、そのホテルのある半島から突き出た島のようなものがある。島のようなものと言う理由は、満潮時には島なのだが干潮時には潮が引くので陸続きになる。この陸続きになる道のことを天使の散歩道＝エンジェルロードと呼んでいる。

このエンジェルロード一帯はきれいな砂浜で、裸足で海に浸かってもとても気持ち良い。

それにしても名前は重要な集客要素だ。名前一つで若い女性なら行きたくなる場所になる。いや若い女性だけでなく老若男女もそんな気にさせてくれる。

見事なネーミング、お見事。座布団一枚だ。



牛の姿の小豆島の頭の部分は、実は首が切れている。胴体や手足の部分は小豆島本島だが頭の部分は前島という島になっている。

この間は海峡になっていて、長さ約2.5kmで1番狭いところは、幅9.9mしかない。土淵海峡という世界最狭海峡でギネスブックにも登録されている。

何本かの橋で結ばれているので生活面では支障はない。最狭部はプロムナードになっているのでゆっくり散策もできる。

こんな海峡は確かに珍しい。私もいろいろ世界を見てきたがちょっと驚きだ。

これに目を付けたのもまたお見事。座布団一枚だ。



■サイクリング

宿のレンタサイクルを借りて自転車で 11km ほど走る。宿泊者には 2 時間まで自転車が無料で借りられる。

自転車で牛の頭部分の前島を一周する。自転車に乗るのは実に久しぶりで、何年かぶりだ。

起伏がそれなりにあるので上り坂はきついが、その分下り坂は楽々で気持ち良い。気持ち良くさせてくれる理由はそれだけではなく、潮の香りたっぷりの海風を浴びながら、瀬戸内海の絶景を見てのサイクリングは実に楽しい。

小豆島のメインの国道 436 号は多少の車は走っているが、県道は広い道路でも車の台数は極めて少ない。だから自転車は我が物顔で安心して走ることができる。

今更ではあるが、歩きとは違う世界を見せてくれる。



■97 才の庵主

牛に例えると鼻先に位置するところに 60 番江洞窟という庵がある。海岸にある洞窟にお堂をつくり、本尊は洞窟の中にある。山の中腹ではなく海岸にあるのは小豆島では初めて見る。



ここには宮崎さんという庵主がいる。この人はなんと大正 9 年生まれで 97 才だという。そしていろいろ話を聞いていくうちに、この人のすごい人生が分かってくる。

妻が着ていた T シャツの英文を読んで訳してくれた。英語ぺらぺらだ。聞けば戦後は GHQ で通訳をされていて、マッカーサーも知っている。知っているというのは歴史上の人物として知っているのではなく会っていたという意味である。計算すると彼は終戦時には 25 才である。その後は英語力をいかして長い間、商社で仕事をしていたという。

そして晩年になってからお坊さんになる決意をして、なんと 85 才の時に高野山大学大学院を卒業してこの道に入ったという。ただし体力の必要な修行は無理なので上位資格は取れないという。

この庵主を慕って訪れる地元も人も多いようで、近所のおばさんたち数人がお茶入れたり庵主の世話をやいていた。



■旭屋旅館に連泊

サービスや設備も良いが、心あたたまるこの宿にも結局2連泊することになる。

2泊目の夕食で、翌日のコースを女将に相談すると、島の北側は食事する場所が限られているのでおにぎりを握りましょうかというありがたい申し出を受ける。二つ返事をお願いする。翌日のチェックアウト時には昼食のおにぎりが2人分用意してあった。

第七章 七日目は頼もしい友人と一緒に

■地球一周の友人

昨日の夕方のことだ。偶然ながら旭屋旅館を経営している一家が「Oさん」という苗字であることを聞いた。実は昨年私たちが乗船した地球一周の船旅で知り合ったOさんという人が小豆島でガイドをしているという。その人の苗字と同じなのだ。

ひょっとしたら思って聞いてみると、なんと旭屋旅館の主人の弟が地球一周に行ったという。しかも時期もコースもピタリと重なる。他にこの島で地球一周に行くような酔狂な人もいないだろうと早速、女将に連絡を取ってもらった。まさしくピンポンだ。

そして今朝出発するためにロビーに降りていくとOさんがいる。今日は車で案内してくれるという。久しぶりの対面とありがたい申し出に感激、お願いすることにした。



〇さんは定年後に地球一周の船に乗り、今後は小豆島八十八カ所霊場巡りの先達をしたいという。先達とは霊場巡りの公式案内人のことで、地球一周の経験を活かしてできれば外国人を相手にしたいという。そのためには英語も必要だが、堅実そうな人柄からはもう準備は整っているような感じである。

1200年続く霊場、小豆島、日本文化を外国人に体験してもらおう架け橋になるという想いは素晴らしい。私もそんな姿勢を是非見習いたい。

〇さんに連れられて北部の霊場を巡る。そして一緒に巡ることで小豆島歩き旅が主目的の私たちにとっては本来のお遍路をしていないことに気が付く。

まず寺に入る時に鐘をつく。そして参拝するのだが、その時に般若心経を唱えるという。その後御朱印をもらい帰るのだが、帰りは鐘をついてはいけないという。

そして、実地訓練のごとく〇さんが般若心経を先導して唱えてくれる。さすが先達を目指すだけのことがある。立派に唱える。

小豆島のこともいろいろと教えてくれる。人口は3万人弱、小豆島町と土庄町に分かれているという。どうして伊豆大島のように一つの町にしないのかと聞くと、昔はいくつかの町や村に分かれていたのが合併して今の形になったという。そして何よりも土庄町はこの小豆島の半分以外に隣の豊島も土庄町だという。お寺だけではなく行政にもいろいろ歴史があると感じる。

ゴマ油工場を指差して、あのゴマ油の工場はかどや製油で業界シェア NO.1 で、見学もさせてくれるという。

そんな話をしながら〇さんは1日付き合ってくれた。

■北部の山岳霊場

今日は島の北部の海岸と山のほとんどを巡る。距離もそれなりにある。とはいっても半分くらいは〇さんの車に乗せてもらってのことで、あとの半分はお遍路気分を味わえるように山道のへんろ道を歩き、その先で〇さんが車で待っていてくれる。本当にありがたい。いたれりつくせりとはこのことだ。

72番奥の院笠ヶ滝には急峻な階段、いや階段というよりも岩壁を登る。手すり代わりに鎖が用意されている。小豆島お遍路の紹介で鎖を手繰って登る姿を写した写真がよくあるが、きっとここだと思う。



そして岩をくり抜いた入り口にたどり着く。この洞窟のような入り口からお堂に入る階段があって、これを登ると岩肌をくり抜くように建てたお堂の中に出る。

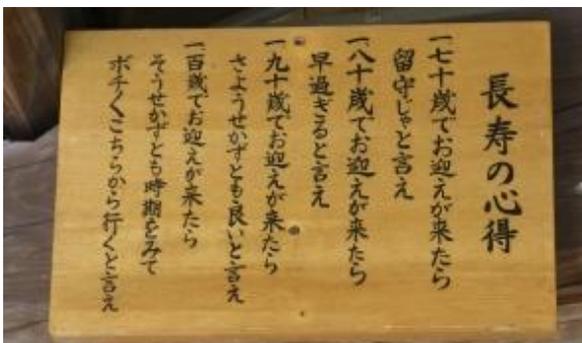
それにしてもこのお堂はすごいところに建てられている。どうやって建てたのだろうか。



■ 貴重な見聞、体験

79番薬師庵で休んでいて、ふと上を見上げると壁に長寿の心得という看板を見つける。

- 一、七十歳でお迎えが来たら、留守じゃと言え
- 一、八十歳でお迎えが来たら、早過ぎると言え
- 一、九十歳でお迎えが来たら、さようせかさずとも良いと言え
- 一、百歳でお迎えが来たら、そうせかさずとも時期をみてボチボチこちらから行くと言え



80番観音寺も立派な造りの寺で、庭がまた素晴らしい。寺門から本堂への道の周りが全て石庭になっている。これも寺の質が高いことを感じさせてくれる。

この寺に入るとお坊さんが般若心経を唱えてくれた。唱え終わると少し雑談をした後に接待をどうぞと言う。

接待とはお寺が参拝者に振る舞う食事などであるが、ここは香川うどん県なので、うどんだ。少々のおぎんぎが入っているだけの素朴な掛けうどんだが実に旨い。出汁がいいのか、やはり

本場だけのことはある。

いくら接待とはいえタダでは申し訳ないので、100円を置いてくる。

81番恵門滝もひたすら階段を上って岩壁をくり抜いたお堂に着く。階段の数は半端ではない。

ここのお堂は半分が木造、あとの半分は洞窟という造りになっている。木造部分は天井に無数の提灯がつるさされている。洞窟部分ではお坊さんが護摩を焚いて祈祷してくれる。この祈祷は効果絶大という気持ちになる。



小豆島の山岳霊場は、どこに行ってもよくこんなところに寺を建てたなと感心させられる。山の中腹の岩壁をくり抜いて、仏像を彫り、お堂を建て修行や信仰の霊場を作る。そんな霊場で参拝し手を合わせると先人たちの想いや意志を強く感じる。

88霊場には入っていないが山の観音も面白い。場所は、牛のリブローズかサーロインあたりに位置する。

ここも山岳霊場で、たまたまOさんの車に乗せてもらったので苦労しなかったが、海岸の県道から3km程山道を歩いて行くので結構大変だろう。

本堂に入るのに真っ暗なトンネルを抜けていく仕組みになっている。トンネル内は本当に真っ暗で何も見えない、そこを左手に壁を感じながら10mくらい歩く。するとうっすらと仏像が浮かび上がってくる。それがとても劇的で、不思議な感覚だ。粋な演出になっている。いや演出と言ったら失礼だろう。人生において本当に何も見えない真っ暗なところを歩くという経験はそうはない。

仏像の間を抜けて階段を上ると本堂になる。本堂の天井には無数の灯籠のようなものがつるしである。全て灯りがともっている。それがまた先ほどの暗闇との対比で面白い。多分暗闇のトンネルの上に本堂がある構造になっている。



本堂には若いお坊さんが待っていて般若心経をあげてくれた。参拝者は私たちだけ、暇そうなので少し話をする。

彼は川崎に住んでいたということで神奈川、東京の話が話題になり箱根駅伝ルート歩き旅、伊豆大島、そして旅のチカラ研究所のことを話す。旅が好きということで旅の話していると電話が鳴り、あと何分したら団体客が来るという情報が入る。商売？の邪魔をしないよう早々に退散することに名刺を渡した。

下山していると団体客を乗せたマイクロバスとすれ違う。

■ かつや旅館

旭屋旅館に泊まっていた時、かつや旅館に電話する。もちろん快諾してくれる。その後、たまたま明日はそちらに行く用事があるので旭屋旅館まで荷物を取りに来てくれるという。これもまたありがたい話だ。

かつや旅館は、牛の背にあたる。島の北側で対岸は岡山県になる。小豆島は南側の四国の対岸が開けていて、北側はあまり開けていない。だからか自然が残っていると言えるかもしれない。

ここは今までの2軒の旅館に比べて一番景色が良い。宿は海に面していて浜辺まで30mくらいしかなく、しかも砂浜なので夏は宿のプライベートビーチのような感じで海水浴ができる。

部屋も風呂も決して豪華とも綺麗とも言えないが、オーシャンビューなので南国のリゾート地のような景色を一人占めできる。

宿泊客は私たち夫婦以外にはもう一人の年配の男性である。私たちは早く着いたので大きな風呂を独り占めして、まだ明るい瀬戸内海を見ながらの入浴は最高だ。

暮れなずむ頃の海もまた見事な光景で、海と空と月のコンビネーションが最高だ。



かつや旅館は民営の国民宿舎だという。国民宿舎とは懐かしい。宿の主人に聞くと現状は名前だけが残っているという。

昔は国民宿舎というと料金が安いのでなかなか予約が取れない。往復はがきで申し込み、宿泊希望が重なれば抽選結果が返信ハガキで戻ってくるシステムだった。だから2~3カ月前に往復はがきを出していた。今では電話やインターネットでの予約になっている。

そして、かつや旅館の宿泊費は6800円（税別）という。40年前の学生時代に使っていた頃はその半額くらいだったことを思い出す。

第八章 八日目で結願

■結願

朝食のテーブルには塩、ラップ、ふりかけが置いてある。お櫃を覗くといっぱいのご飯がある。どうやら、おにぎりを勝手ににぎってくださいという意味らしい。朝食のおかずの漬物や焼き鮭も入れて妻がおにぎり握る。これも遍路宿ならではの計らいであろう。

昨日はOさんのお陰で、かなり回ることができたため、本日は2カ所を参拝しておしまいになる。最後の83番福田庵で結願（けちがん）する。八十八カ所全てを回ることを結願と呼ぶ。

■願いごと

結願して振り返るといろいろ思い出す。特に88回以上も参拝したので、どんな願いごとをしたかだろう。

関東八十八カ所霊場を巡った時、ある寺で「不動様をお願いをするのではない。あなたが目標に向かって努力することを不動様の前で誓うものである。」ということが書いてあった。まさしくその通りで仏教の神髄に触れたような気がした。

キリスト教やイスラム教は神がこの世を造った創造主なので、その神に頼めば自分の手が届かない願いを叶えてくれるかも知れない。しかし仏教は人間である釈迦が悟ったことを民に教えること、つまり生き方のヒントを示しているのに過ぎず、仏に頼むのは無理がある。

自分が何をするというのを誓うことで参拝することが本来かもしれない。

あるいはこんな考え方もある。どんな願いでもいいから全て異なる願いごとをしていく。そうすると108回までは人間の煩惱なので109回以降が煩惱でない素直な願いが出てくるという。

今回、私はなるべく異なる願いごとを試みたが、10か20くらいの願いしか出てこない。挙句の果てには宝くじが当たるようになど願う始末だ。まったく心も財布も貧困だ。

せっかく1週間で88以上参拝するのだから、何かテーマを決めて願う、誓うことをお勧めしたい。

■参拝スタイル

私たち夫婦ともお遍路衣装でなく普通の服装で巡った。妻は途中から杖を持つようになったが、私は杖も持たない。お遍路ではなく歩き旅と位置づけたからだ。

振り返るに白衣（はくえ）、菅笠（すげがさ）、杖（つえ）は用意した方が良いと感じている。

形から入る訳ではないが、1200年の歴史を体感できるような気がする。あるいは地元の人、他のお遍路、旅行者にお遍路をしているということが分かりやすいので交流の可能性が高い。接待もあるかも知れない。せっかく歴史や人情の島なのだから、様々な体験をお勧めする。

杖はどここの寺や庵でも杖たてがある。そして 88 霊場の参拝が終わるとき、つまり結願するところで奉納する。奉納されている杖を借りて巡り、また返すということもできる。

般若心経も唱えたい。暗記する必要はないが、ただ唱えるのではなく大雑把でいいから意味を理解することをお勧めする。分かり易く解説しているサイトや本もある。

般若心経は簡単に言うと、仏教の経典の空の思想に関する部分だけを抜粋したもので、全てのものは空で無であると言っている。だから目に見えるもの、そこから感じたことなどは全て存在せず、それらの無知からくる悩みもない。

仏教以外でも広く唱えられているが、浄土真宗と日蓮宗はその教義から般若心経を唱えない。

第九章 旅の記録

■参拝した霊場と歩数

日程毎に霊場の番号を参拝した順番に記載する。歩数は総合計で 216502 歩、歩幅を 70cm で計算すると約 150km になる。

バス、自転車、自動車にも乗っているので全部歩いたとすれば 200km くらいになると思う。

<1 日目>

霊場 84 番、85 番、86 番、87 番、88 番

歩数 26924 歩

<2 日目>

霊場 12 番、13 番、11 番、9 番、8 番、7 番、2 番、1 番、3 番奥の院、3 番、4 番、5 番、6 番、10 番

歩数 35704 歩

<3 日目>

霊場 14 番、20 番、18 番、19 番、17 番、21 番、22 番、23 番、24 番、25 番、27 番、26 番、15 番

歩数 33904 歩

<4 日目>

霊場 28 番、29 番、30 番、31 番、32 番奥の院、34 番、32 番、33 番、36 番、37 番、39 番、38 番、35 番、

歩数 31253 歩

<5 日目>

霊場 48 番、41 番、42 番、45 番、43 番、44 番、47 番、48 番、46 番、74 番、49 番、50 番、52 番、54 番、51 番、55 番、56 番

歩数 34716 歩

<6日目>

霊場 70 番、69 番、68 番、67 番、66 番、65 番、53 番、57 番、58 番、58 番奥の院、総本院、64 番、61 番、60 番、59 番、62 番、63 番

歩数 25176 歩（一部でバスと自転車を利用した）

<7日目>

霊場 71 番、72 番奥の院、72 番、73 番、75 番、76 番奥の院、76 番、77 番、藤原寺、78 番、79 番、80 番、81 番、山の観音

歩数 14256 歩（自動車に乗せてもらったため少ない）

<8日目>

霊場 82 番、83 番

歩数 14569 歩（一部でバスを利用した）

■費用

費用の総額は夫婦二人で約 12 万円、詳細は以下に記す。

<宿泊>97958 円

ひろきや旅館（3泊6食）44260 円

宿泊費 6700 円×2人×3泊=40200 円

ビール 570 円×3本=1710 円

草履 350 円

旭屋旅館（2泊4食）28100 円

宿泊費 6700 円×2人×2泊=26800 円

ビール 650 円×2本=1300 円

かつや旅館（1泊2食）15228 円

宿泊費 6800 円×1.08%×2人=14688 円

ビール 500 円×1.08%=540 円

高松宿泊費用 10370 円

高松パールホテル素泊まり 7000 円ーポイント 1200 円=5800 円

夕食 讃岐うどん 570 円×2=1140 円

朝食 セブンイレブンの朝セブン 200 円×2=400 円

フェリーのうどん 390 円

池田～高松フェリー 往復 1320 円×2人=2640 円

<交通費> 7280 円

島までのフェリー 6080 円

姫路～福田 1520 円×2人×2=6080 円

島内バス 1200 円

土庄～長浜 300 円×2人=600 円

小部～吉田 300 円×2人=600 円

<昼食> 5974円

- 1日目セブンイレブンの朝セブン 200円×2=400円
- 2日目ひしお丼 1030円+ハモの卵とじ丼 870円=1900円
- 3日目お好み焼き豚玉 450円+うどんモダン焼き 500円=950円
- 4日目道の駅そうめんのラーメン 650円+こびきうどん 450円=1100円
- 5日目昼食抜き
- 6日目ジョイフル 637円×2=1274円
- 7日目宿の差し入れおにぎり無料+そうめん 350円
- 8日目宿の朝食の残りをおにぎりにしたので無料

<参拝費用 御朱印など> 9740円

- 納経張 1000円
- 地図 100円
- 御朱印代 寺 150円×30=4500円
- 御朱印代 庵 50円×64=3200円
- 賽銭 10円×95=950円 (94+山の観音)

以上の合計額は 118962円になる。この他に姫路のタクシー代や自販機で買った飲み物などが加わるので 12万円を少し超える。

7泊8日の歩き旅が一人当たり約6万円は過去の同様な歩き旅に比較しても安い。宿泊費が6700円程度で済んだのが大きな要因だろう。

■お勧め

小豆島のお遍路が多いのは春3月～5月上旬、そして秋10月～11月という。そもそも農閑期で田植えの前、そして収穫後がシーズンらしい。恐らくその時期がベストシーズンなのだろう。

私たちが島に入ったのは5月24日なので少し外れている。だから他のお遍路にはほとんど出会わなかった。その代りに宿もすいていて無理もきいてもらったのかも知れない。

今回の歩き旅、間違いなく行って良かったと思う。それは関東八十八カ所霊場巡りの時にこの小豆島八十八カ所を熱く勧めてくれた住職に感謝したい。

同じように私も多くの人にこの小豆島八十八カ所霊場巡りを熱く勧めていきたい。